

平成23年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 ハタハタ

学名 *Arctoscopus japonicus*

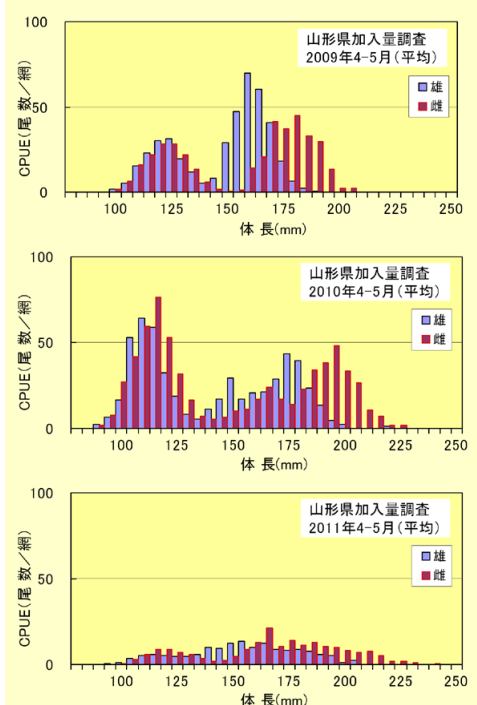
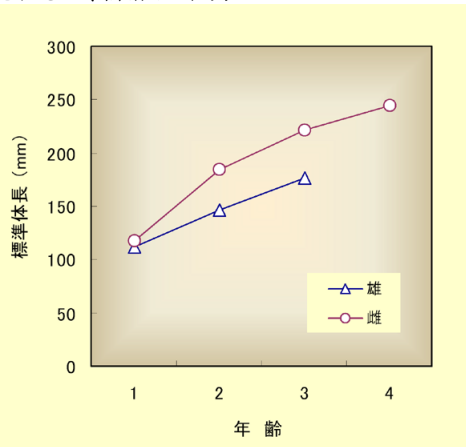
系群名 日本海北部系群

担当水研 日本海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 5歳(年齢は、ふ化した年を基準に暦年で示す)
成熟開始年齢: 雄:1歳(100%)、雌:2歳(100%)
産卵期・産卵場: 12月の極短い一時期、沿岸の藻場、秋田県での産卵が多い
索餌期・索餌場: 未成魚期以降の分布と回遊に関する知見は少ない
食性: 端脚類、橈脚類、オキアミ類、イカ類、魚類
捕食者: 大型魚類によって捕食されるが、詳細は不明

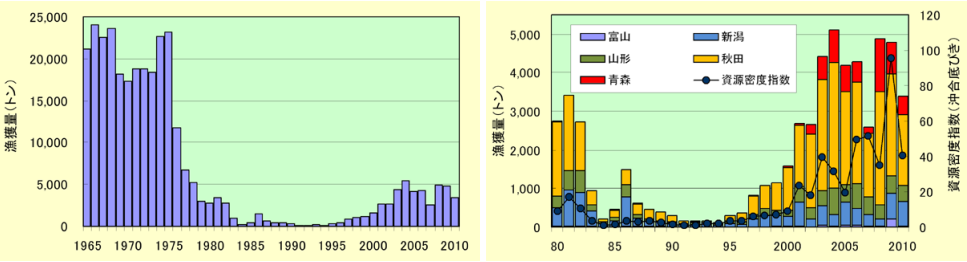


漁業の特徴

日本海北部のハタハタは秋田県での漁獲が多く、産卵・接岸期を対象とした定置網と刺し網(沿岸漁)による漁獲割合が大きい。また、ほぼ全域において小型底びき網や沖合底びき網(沖底)によって漁獲される。

漁獲の動向

日本海北部に分布するハタハタの漁獲量は、2万トン以上あった1970年代の多獲期から1980年代に急激に減少し、1984年には206トンに至った。その後、1986年には1,484トンの漁獲量があったものの、1987年以降は減少し低迷を続けた。漁獲量は2001年から徐々に増加し、近年では2千トンを上回り、2009年は4,786トン、2010年はやや減少して3,398トンであった。



資源評価法

漁獲量を基本情報とした。ただし、2003年より漁獲努力量の削減措置がとられていることから、資源水準及び動向の判断には、漁獲量だけではなく沖底の漁獲成績報告書による資源密度指数、漁獲物の体長組成から推定した年齢組成、及び1歳魚の豊度も加えた複合的な情報を用いた。漁獲物の体長組成は特に山形県の漁獲物組成を、1歳魚の豊度は、山形県による新規加入量調査結果を重視した。

資源状態

1998年では1千トン程度であった漁獲量は、2001年には2千トンを超え、2年後の2003年には3千トンを超えた。2003年以降、自主規制が実施された2007年を除き、およそ3,400～5,400トンの範囲で推移したことから、動向は横ばいと判断した。本系群の特性と考えられる1～3年周期の大きな増減がみられるものの、漁獲量3千トンを超えた近年、低位水準を脱したと判断した。一方、漁獲量が2万トンを超えていた1965～1975年の多獲期には依然及ばないことから、当面は高・中位の境界の設定は保留とし、漁獲量3千トン未満を資源水準の低位と定義した。これにより、2010年の資源水準は中位と判断した。



管理方策

2011年の主体である2008年級(3歳)はやや低調であるが、2008年級より豊度が高いと推察される2009年級(2歳)が漁獲加入し始めた。2012年は2歳となる2010年級、3歳となる2009年級を主体とした漁獲となる。2010年級の豊度は未だ明らかになっていないが、2003年より漁獲努力量の削減措置がとられていることを考慮し、当面は現状の漁獲圧を維持することとした。ただし、2010年級の豊度を早急に判断し、速やかに対応する。

	2012年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	4,100トン	1.0Cave2-yr	—	—
ABCtarget	3,300トン	0.8・1.0Cave2-yr	—	—

- 100トン未満を四捨五入

資源評価のまとめ

- 漁獲に関する自主的・公的規制の下で、漁獲量は増加傾向
- 年変動はあるものの、資源は2003年以降中位水準を維持
- 2010年級の豊度についての判断は保留

管理方策のまとめ

- 当面は現状の漁獲圧を維持し、漁獲物の動向を注視
- 2010年級の豊度を早急に判断し、速やかに対応
- 網目拡大を継続的に呼びかけ、小型個体の漁獲を抑制
- 水産庁では2003年7月に「資源回復計画」を作成

執筆者: 松倉隆一・藤原邦浩・後藤常夫

資源評価は毎年更新されます。